

ハワイ大学医学部臨床推論ワークショップ 報告書

○研修を通して得られた成果

・実際の救急科の病室を模した部屋で実際の患者を模した模型を使って、4人グループで5分以内に患者の容体や主訴から鑑別診断や治療の選択をし、その後自分たちの5分間の動きに関しての反省会を行い、その後再度同じシチュエーションで5分のシミュレーションを行うというプログラムがあった。佐賀大学で4年生までに習う範囲の医学の知識のみが求められたが、時間制限を設けられて4人でチームになって鑑別から治療まで行うというのは座学で疾患についての知識や鑑別と治療の方法について学ぶのとは異なり、トレーニングを積まないとの的確に動くことは難しいことを理解できた。知識を蓄えるインプットだけでなく実践的なシチュエーションを模したトレーニングでアウトプットすることの重要性を痛感させられた。

・OSCEの医療面接では挨拶や主訴の聞き方のテンプレートを覚え、その型通りに遂行することを評価されたが、ハワイ大学の医療面接の試験では医者役側が手指消毒をしている最中に患者役に対して「How are you doing today?」などの日常会話による医師—患者の関係性構築が評価され、医師として実際の診療で使える実践的なコミュニケーションがどういうものかを考えさせられる良い機会になった。

・留学というものは人生において初めてだったがハワイのコミュニケーションの価値観が「年上を敬い、調和を大事にし、協調性を重んじる」というもので日本にとっても似ていることもあり、あまり異文化らしさを感じることはなかった。一つ学んだことをあげると、まだお互いを知らないような関係の人とコミュニケーションをとる時、怒られることや嫌われることを恐れたり、衝突を回避しようと奥手になったりするのではなく、相手に興味と好意を持って接すればコミュニケーションはうまくいくことが多いということだ。

○今後の抱負

・今回はハワイ大学の先生や学生が手厚くもてなしてくれたので、「お客様」の立場としてかなり居心地の良い環境で勉強することができたが、次回はもっと現地の実際の職場や学習環境に深く入り込んでいき自分が「異物」になるような環境で留学したい。そうすることでより異文化や国際への理解が深まると思われる。

瞬きや呼吸の動き、呼吸や心臓の音、バイタルなどが本物の患者のように再現されるマ
ネキン

これを使って4人グループで5分の時間制限で入院中にベッドから落ちて頭を打った症
例の鑑別から治療までを行うシミュレーションを体験した



ハワイ大学臨床推論 WS に参加した成果

2024年3月18日(月)～22日(金)に John A. Burns School of Medicine University of Hawaii (JABSOM)で行われた The March 2024 Learning Clinical Reasoning Workshop に参加して参りました。参加者は愛媛大学から4名、藤田医科大学から2名、高知大学から3名、大阪医科薬科大学から2名、佐賀大学から4名、東海大学から5名、山梨大学から2名、琉球大学から1名の計23名でした。5日間のWSの中で、2,3日目に模擬患者さんへの医療面接、4,5日目にマネキンシミュレーションを行い、その他の時間で臨床推論やPBLに関する講義、Hawaiiの文化体験、JABSOMの生徒との交流を行いました。

<医療面接>

「息切れ」や「胸痛」を主訴とする模擬患者さんに英語で医療面接を行い、呼吸音・心音の聴診まで行いました。前日に問診の講義とペアでの練習があり翌日実践する形式でしたので、前日ホテルで練習することができました。JABSOMでは“Waiting Room”“Exam Room”“Feedback Room”の3つの部屋が存在し、“Exam Room”のカメラ映像を先生が裏で見ている、その後すぐに“Feedback Room”でフィードバックをもらいました。呼吸音の診察の際に患者さんにかかる「吸って/吐いて」の言葉は英語で“In and Out”ということを教わりました。英語での医療面接は初めての経験でとても緊張しましたが、OSCEの練習にもなり大変貴重な実践の場でした。日本では診察室に患者さん呼び入れる形式ですが、米国では医師が患者さんの待合室に出向く形式であるため、最初にドアのロックを行います。そのため、私たち医師の第一印象はドアのロックで決まり、ロックでいかに信頼感や優しさを表現するかが大切だと教わりました。



<マネキンシミュレーション>

JABSOM のマネキンは単に呼吸音や心音が聞き取れるだけでなく、血圧、サチュレーション、心電図、瞳孔反射、舌の色などを確認することができ、さらに酸素投与、点滴、薬剤を投与することができる画期的なものでした。具体的には、ショックと神経に関する疾患で大人と子供の2つのケースで行いました。3つの班に分かれ、1つ目の班は問診や身体診察を行いながら診断と治療を行います。2つ目の班は主訴の情報から考えられる鑑別診断、行うべき身体診察や検査を考え Perfect World を作りあげます。3つ目の班は1つ目の班の情報を聞きながら鑑別診断を考えます。この班をローテーションし、より実践的、臨床的なケースを再現することで、何をすべきなのか、どういった思考過程が必要なのか、またその過程で役割分担、優先順位など何が大切なのかを考えさせられました。単に医学を学ぶだけでなく、実際の臨床で医師の役割は何なのか、何をすべきなのかまで常に意識させる教育を JABSOM の生徒を受けているという刺激を得ることができました。



<PBL・臨床推論>

JABSOM の PBL は基本的に私たちが佐賀大学で行っているものとほとんど同じでした。異なるのは“high probability”と“high utility”の2つの観点から Hypothesis を評価していた点です。すなわち、JABSOM の PBL では疾患の可能性だけでなく、見落としとしてはならない致死的な疾患があるかどうかも考慮していました。私は PBL で漠然と「症例の疾患(答え)」に重点を置いてしまっていたことに気付かされました。PBL のプロセス1つ1つに意味があり、それを日々の問題や病院実習での患者さんで実践することで「より良い医師」になる素地を養うことができると感じました。

臨床推論では、予め疾患を予想して行う“Experts”の視点、様々な疾患を網羅的に検索し鑑別疾患を絞っていく“Students”の視点の2つが重要であると学びました。私たちが今できる“Students”の視点を磨くことが大切だと感じました。さらに、“Disease”と“Illness”は異なり、病気の診断のためには“Disease”について理解する必要がある、患者さんのためには“Illness”について理解する必要がある、その2つを解決することが医師の役割だと再認識しました。

<Hawaii の文化体験・JABSOM の生徒との交流>

2,3日目に Lei を作る時間や Hula を練習する時間がありました。そこで、WS に一緒に参加している学生とゆっくり話す時間もありました。最終日には Aloha Lunch があり、そこでハワイアン料理を楽しみながら、JABSOM の先生方、学生との最後の時間を楽しみました。学校だけでなく、ワイキキで JABSOM の学生と食事をしたのでそれも貴重な体験となりました。右の写真は今年7月に佐賀大学に来られる JABSOM の生徒との写真です。

<まとめ>

今回の WS は、他学部卒業後の再受験や社会人経験など様々なバックグラウンドを持つ日本の学生と会える貴重な機会でもありました。今後も定期的に彼らと会うことで刺激を受け続けていきたいです。また、参加した学生は1~5年生まで学年は様々でしたが、私と同学年、4,5年生の先輩方との知識の差を強く感じました。彼らのようになれるよう今後もより一層勉強に励んでいきたいです。また、このような留学や国際交流に関してさらに積極的に参加して自分の視野を広げていきたいと感じました。5,6年次にはハワイ大学などの臨床実習での留学にも参加したいです。

最後に、WS でお世話になった JABSOM の先生方、学生の皆さん、Kori-Jo さん、WS 参加に際して支援してくださった福森先生、医学教育部門の木本さんをはじめとする佐賀大学医学部関係者の方々、学生課、講演会、同窓会の方々に感謝申し上げます。

ハワイ大学臨床推論 WS に参加した成果

1) WS の概要

まず、今回私が参加したプログラムは「Learning Clinical Reasoning Workshop」という5日間のワークショップ(以下 WS)である。参加者は、琉球大学、佐賀大学、愛媛大学、高知大学、大阪医科薬科大学、藤田医科大学、東海大学、山梨大学から合計23人だった。

WSの内容を大まかに説明すると、clinical reasoning についての講義を挟みながら、模擬患者との医療面接から身体診察までの patient encounter を2日、マネキンシミュレーションを2日行った。clinical reasoning という臨床推論の考え方をベースにしながらも、patient encounter やマネキンシミュレーションなど、より実践的な授業がメインだった。今回の WS では、佐賀大学で取り組んでいる PBL と同じ形式の授業はなかった。また文化交流として JABSOM の学生と一緒に Lei 作りや Hula レッスンにも取り組んだ。

2) WS を通して学んだこと・考察

最初に教わったのは、人の印象は会って2秒で決まるから、ノックの仕方が大事だということである。日本ではノックの重要性について習ったことがなかったが、強いノックだと怒っているように感じ取られ、弱いノックだと不安や恐れを感じ取られ、速いノックだと急いでいるように感じ取られるため、適切な強さと速さでノックすることが大事だと学んだ。Clinical reasoning についての授業では、Experts(=医師)と Students の推理の仕方の違いを学んだ。それは、Experts は illness script を読んで素早く結論を出すのに対し(=system1)、Students は様々な可能性を考えて質問を沢山してゆっくり結論を出す(=system2)ということだ。この2つの推論法を両方使うことが大事だと学び、私たち Students は右に示す7つのステップを踏んで clinical reasoning を繰り返し行うことで Experts になっていくと教わった。また、症例を用いた練習では、先生の問いかけに対し少人数の班ごとに意見を出し、学生が出した答えによって、次に先生から得られる情報が変わってくるという今までに取り組んだことのないやり方で新鮮だった。佐賀大学の PBL では、シナリオが次々と配られるため、自分たちで思いつかなかった身体診察や検査の情報も書いてあるが、このように自分たちで考えついた項目のみ情報が得られるとなると、いつも以上に真剣に取り組むことができたと思う。

The seven steps of clinical reasoning for medical students

1. Start with available facts.
2. Define the patient's problems.
3. Hypothesize and prioritize the differential diagnosis.
4. Obtain and interpret clinical data.
5. Draw appropriate conclusions.
6. Add to your knowledge base.
7. Add to your clinical experience.

Patient encounter は、模擬患者を相手に医療面接と聴診などの身体診察を英語で行い、その様子を別室で先生がモニタリングしていて、直後にフィードバックをもらえる仕組みだった。フィードバックでは良かった点ばかりを褒めていただき、アドバイスもとても具

体的で日本との指導の違いに驚いた。模擬患者さんと英語でコミュニケーションを取るということでとても緊張したが、ノックの仕方や clinical reasoning の手順など、教わったことをすぐに実践することができ、知識の定着に役立ったと思う。

最後に、マネキンシミュレーションは私が今回の WS の中で最も苦勞した授業である。実習では、本物さながらの大人と幼児のマネキンを用いて、実際のベッドサイドの想定で看護師役の人に history taking をしながら患者に処置を施す必要があった。どんな症例かは事前に知らされず、今回の症例がショック状態の大人、頭部外傷の大人、けいれんしている幼児、ALL の既往がある幼児の4つで、私はまだ小児や救急、神経内科の学習をしていなかったため知識も無く、薬や病名、治療法の英語も分からず、何もできなかったことがとても悔しかった。実習はすごく緊迫感がある中で自分たちで考え、コミュニケーションを取り、動くため、知識が定着しやすいと感じた。またそれぞれの症例に対し、ベッドサイド班、記録班、理想のシナリオを考える班の3つに分かれて同じ症例を2回繰り返すため、1回目後のリフレクションで出た反省点を2回目で生かすことができ、学びが深まった。

3) 学習・国際理解への意欲関心に関して、参加前後での変化

学習面では、日本の他大学の学生が自分よりも圧倒的な知識量と英語スキルを持っていたこと、JABSOM の学生が休日も勉強していると知ったことで今までの自分の学習に対する姿勢が甘かったと思い、医学や英語の勉強に対するモチベーションが上がった。また、医学英語は個人的に覚えるのが苦手なのだが、実際に生きた英語で聞くとすんなり入ってきたので、医学英語と Unit の学習を分離せず、一体化させて学習しようと思う。国際理解への関心については、授業でアメリカとハワイと日本のコミュニケーションスタイルの違いを学んだ。他にも医療や患者の意識など国による違いについても知りたいと思った。またハワイの文化にも少し触れる機会があり、国際理解への関心は高まったと思う。

4) 次の海外留学への関心

このハワイ大学の WS は、私が入学前から必ず参加したいと決めていた WS だった。今回の WS の内容はかなり臨床の知識を要したため、3年生の終わりの春という1年間臨床を学んだタイミングで参加でき、今まで学んだことが生かされたのと、これからの勉強のモチベーションになったので良かったと思う。5日間という短い期間では、英語や環境、新しい仲間慣れたところで WS が終わってしまい、非常に惜しいと思った。次は、語学留学も視野に入れながら、英語を学び続け、5、6年生で臨床実習生として海外留学に挑戦したいと思う。

最後に、今回このワークショップに参加するに当たり、サポートしてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。

ハワイ大学臨床推論 WS に参加した成果

1. Workshop で学んだこと

・医療面接と身体診察

2日目と3日目に、模擬患者さんのご協力のもと医療面接と身体診察を行った。そのため、医療面接において重要なことを講義で教わった。

まずはコミュニケーションで、Respect, Empathy, Active listening の3つを学んだ。また、患者さんとの信頼関係のため最も重要なのは第一印象であり、患者さんと顔を合わせてからたったの2秒で第一印象が決まると教わった。

次は問診で、患者の主訴から考えられる疾患を頭に思い描いた上で、Quality, Quantity, Location, Setting, Chronology, Alleviating and aggravating factors, Associated manifestations の7つに沿って質問をしていくことを学んだ。肺と心臓の身体診察も行い、患者に配慮しながら身体診察する方法を学び、実践した。

とても緊張したがなんとか乗り越えることができ、フィードバックで教えてもらったことを2回目に活かすなど、学ぶことが多かった。

OSCE もまだ終わっておらず日本語で行うこともままならない段階で英語でこれらを練習し実践できたことは私にとって大きな成長の材料となったので、今後日本で行うときもWSで学んだことを思い出して行おうと思う。

・臨床推論とラボでの実習

様々な症例で臨床推論を行った。佐賀大学で行っているPBLとほぼ同じ流れで周りの人と話し合い、疾患名にたどり着く練習をした。何を知らなければならないか(Need to know)を考えると医療面接で身につけた質問事項が役に立ち、全てつながっていることを実感した。

ラボではマネキンを用いて実習を行った。ハワイ大学のマネキンはとてもリアルで、声が出たりチアノーゼが出たり、対光反射が確認できたり、また治療の際も静脈注射ができたりなどした。数人のグループに分かれてマネキンの症例検討とバイタルなどのチェックと処置を行い、その後全員で討論した。上級生はともかく同じ三年生でもとても知識があり、理解が進んでいることを感じて刺激を受けた。

臨床推論でも現場でも、バイタルなどの基本的な事項を忘れないこと、メンバーと協力することの重要性を学んだ。

・交流

日本の他大学の学生、Jabsomの学生とたくさん交流することができた。Jabsomの学生はハワイ大学の施設について説明してくれたり、大学の近くの施設へ昼食を買いにつ

れて行ってくれたり、レイの制作やフラダンスを教えてくれたりした。また三日目にはワイキキのレストランで夕食を一緒に食べ、最終日にはアロハランチで昼食を一緒に食べた。拙い英語ながらも私が頑張って話したことに丁寧に伝えてくれ、英語での会話がもっとできるようになりたいと思わせてくれた。7月には一部の学生が佐賀大学に来てくれるので、それまでにもっと話せるようになっておきたいと思う。

日本の他大学の学生とは授業で協力して学んだり放課後に一緒に観光したりして仲良くなることができた。違う大学の医学生と関わることはとても楽しく、彼らの英語力、医学の知識、意識の高さに刺激を受けた。これからもせっかくできた友達なので交流していきたいと思う。

2. その他学んだこと

ハワイの文化がとても好きだった。WSの前後や放課後に観光したが、人々が本当に親切で優しく、おおらかな雰囲気だった。

授業で、たとえば Aloha にはただの挨拶だけではなく無条件の尊敬、人々への関心、配慮などの意味が込められていると教わった。もちろん人はそれぞれ違う人間なので様々な考え方の違いはあるが、それを無理に理解する必要はない。ただ、どんなときでも尊敬はしないとイケない、という考え方だった。すごく素敵でいい文化だと感じた。

3. WS 参加前後で変わったこと

参加していた学生の英語力の高さ、医学の知識の量、意識の高さにとても刺激を受けた。同じ三年生でも自分より知識が豊富なことがあったり、会話していて日頃の勉強や活動に対しての意識がとても高かったり、尊敬する部分がたくさんあったと同時に、日本に帰ってからのモチベーションになった。

また英語力に関しても、帰国子女なども意外に多く、自分よりもとても上手な人がたくさん参加していた。Jabsom の学生とも話す機会が多くあり、なるべくコミュニケーションをとるよう頑張って会話した。しかしまだまだだと感じる事が圧倒的に多かったので、七月に Jabsom の学生が佐賀に来る時までにもっと上達したいと感じ、実際に3月29日に佐賀大学本庄キャンパスで行われた留学生ウェルカムパーティーに参加し、留学生と会話した。自分からいろいろなものに挑戦してみようと思えるようになったこともよかったと思う。

これから CBT や OSCE、臨床実習などが待っているので、今回得たモチベーションと考え方を忘れずに取り組み、いろいろなことに積極的に挑戦する心を忘れないようにしましょうと思う。